

芭蕉元禄事業 奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民俳句ポスト

平成三十年一月度 入選句（投稿総数三千五百三十一句・一般投句数四百五十一句）

特選

カレンダー反りの落ち着く松七日 大垣市 官脇 和子

初暦が掛けられて七日正月を迎えたのである。暦が掛けられるまで、カレンダーを丸めておいたであろう。カレンダーを掛けた時には、カレンダーの下の方が丸まっている。七日正月ともなると、カレンダーの丸まった辺りが整ってきている。

何気ない日常の風景だが「反りの落ち着く」の措辞が広がりを持たせている。正月七日ともなれば、仕事する人たちも正月気分を取り戻し、少しは落ち着いて働いてもらわねばなるまい。カレンダーの反りばかりではなく、人の心の反りも落ち着かせたいものである。

常夜鍋 同じ話の繰り返し 大垣市 吉田 てるみ

季語は「常夜鍋」で冬。「常夜鍋」とは、毎晩食しても飽きないという意味で使われ、豚肉とほうれん草など葉物野菜をさつと煮てポン酢などで食べる鍋料理である。

掲句の「同じ話の繰り返し」は、それでも飽きていないのである。それは「常夜鍋」の意味で説明したが、毎晩食っても飽きないのであるから。同じ話なのだが、前の日とどことなく、何かが違う。すこし前に進んだ話になっているのか。常夜鍋も食べ飽きたりはしないというのだ。楽しい「取り合わせ」の句である。

門をせし無住寺の寒椿 三重県四日市市 後藤 允孝

「門をせし」無住寺の寒椿の二句一章句である。門がしてるのだから、おそらく誰も出入りをしてないことを暗示している。しかも「無住寺」である。無住寺とは、住職のいない、誰もいない寺のことである。まず、人は、近くにはいない状態なのである。そこに「寒椿」が咲いていた。

俳句は、何を作者が感じとったのか。読者に何を伝えたかったのか。読み手は、「十人十色」。俳句だけが勝手に主張する。そんな性格の持ち主である。

私は、この俳句に「自然の生命力」を感じた。「寒椿」の、「寒」という時期が来ればこの椿は咲くのである。そして、人のいない無住寺なので、句の中に「寒さ」が閉じこめられている。季語の生きた俳句である。

秀逸

雪吊りの一本毎の気概かな 養老郡養老町 田中 秀草

熱爛や涙する日も笑ふ日も 養老郡養老町 田中 紫香

靴下に右ひだりなし寒の入り 東京都世田谷区 関戸 信治

湯豆腐に病癒されゆく予感 岐阜市 花川 和久

兄弟とわかる揃ひの冬帽子 揖斐郡池田町 木塚 しょう

折り返し出来ぬ人生冬至粥 大垣市 鶴田 信子

凍てし日は明日への序奏根は眠る 羽島郡笠松町 易田 喜芳子

冬燈村にひとつのカフェテラス 大垣市 佐藤 すみ子

お降りの一滴神馬の眸を伝ふ 大垣市 新町 恵子

張替えて明り奥まで白障子 大垣市 高石 政明

入選

横笛の張りさける音や寒ざらい
うすき和紙ほの裏返る冬至の日
受く破魔矢笑顔慎まし緋の袴
湯豆腐の動き出したる音掬ふ
寝返りの出来て嬰の手日向ぼこ
障子越し内緒話の影動く
言い訳を懺悔に変えし除夜の鐘
毛糸編む手の皺深き子守歌
側溝に風のいふまま落葉塚
冬夕焼西連山の黒屏風

静岡県静岡市 見城 正暢
瑞穂市 伊藤 恵水
安八郡神戸町 早津 郁男
大垣市 日比野 友子
大垣市 佐竹 余史美
大垣市 早崎 美弥子
大垣市 ケセラ・セラ
大垣市 松岡 みつ
大垣市 平野 きぬよ
羽島市 伊藤 みさの

入選

熱爛や友には本音つきぬ夜
流水の吼え軋む声われを呼ぶ
鉛筆のかする音のみ夜の雪
ピエタ像聖夜の賑わひを知らず
夫婦箸土の匂へる齋粥
山里の日暮は早き吊し柿
日当りにふくら雀の五羽六羽
三日果つ二人となりて日はやさし
席ゆずる少女の動き寒ぬくし
初日射す絵馬鈴生りの天神社

大垣市 平野 ヒサエ
養老郡養老町 山田 順子
岐阜市 島 めぐみ
岐阜市 小湊 順子
岐阜市 伊藤 瑞実
安八郡神戸町 澤崎 和子
大垣市 伊藤 有紀
大垣市 吉田 てるみ
大垣市 多和田 一徳
愛知県名古屋市 岩田 遊泉

選者吟

靴箱の隅に春待つ万歩計

永山